

日本記者クラブ会報

第341号
1998年
(平成10年)
7月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル100-0011
◎社団法人 日本記者クラブ
☎〇三三五〇三二七二二(代)

副理事長に杉田亮毅氏を互選 —総務、企画、資格委員長も交代—

副理事長の斎藤明氏と会員資格委員長の斎藤一路氏が、毎日新聞社社長、共同通信社社長に就任されました。おめでとーございませう。

両社長の辞意表明を含め、四社から出された役員交代の届けを受けて六月十七日に理事会を開催、補充の人事を決定しました。

その結果、新理事に木戸湊(毎日新聞常務主筆)、松崎稔(共同通信専務理事編集主幹)、恒川昌久(信濃毎日新聞取締役東京支社長)の三氏が、新監事に有岡忠樹氏(北日本新聞東京支社長)が就任。新副理事長に総務委員長の杉田亮毅氏(日本経済新聞代表取締役専務)を互選した後、総務委員

長に企画委員長の神塚明弘氏(朝日新聞常務)、企画委員長に木戸

氏、会員資格委員長に松崎氏が委嘱されました。斎藤さんは九二年七月から理事を務められ、企画委員長、副理事長として、また、斎田さんは九六年六月に理事になられ、会報委員長、会員資格委員長としてご尽力をいただきました。

- ① 三十五歳未満会費制度の新設
- ② 賛助会員入会の促進
- ③ 発表の場としての機能促進
- ④ 取材証の使用条件の変更

懸案だったクラブ活性化のための具体策が同理事会で決まりました。内容は右記の四項目です。

このうち若手の現役記者に親近感を持ってもらうための措置が三十五歳未満会費制度の新設と取材証の使用条件の変更です。賛助会員入会の促進と発表の場としての機能促進の二項目は、主に収入拡大のための取り組みです。

新設の会費制度は、これまで入会しにくかった三十五歳未満の現役記者に、安い会費で門戸を開くものです。マスコミ各社の法人会員に属し、個人A会員に該当することと、会費を個人で負担することが条件。月額三千円です。

また「取材証」はこれまで、非会員の記者が会見取材するためのIDとして、限定して使用されてきました。これを、「取材証」を携行していれば会員と同じに、つまりクラブプレス通やラウンジなどの施設を自由に利用できるように改めるものです。「取材証」は各社の基本会員の数だけ発行されて

います。地方紙・地方局の方々も、東京にお出での際、大いに利用していただきたいと思えます。

残る二項目は、字数の都合で八月号で説明しますが、一言ずついえば①過去十二年間新規の入会を抑制してきた企業・団体の法人賛助会員を、定款に合致する法人の中から厳選して、減少分程度補充する②賛助会員または非会員がクラブ施設を使って行う記者発表・会見を促進する—というものです。当然ながら、いずれも厳しい歯止め措置がかけられています。

九月から実施し、一年後の見直しを予定しています。詳しくは事務局にお問い合わせください。

『会報アンケート』にご協力を

会報委員会では、会員皆様にとらに親しまれる会報作りを目指して『会報アンケート』を実施します。これまで三回実施してきましたが、今回は初の景品付きです。回答者の中から抽選で、クラブ特製のネクタイあるいはハンカチセットをお贈りします。ご協力を。

(専務理事 那部 吉正)

十・六・三三

心

小沢一郎

▲小沢一郎 自由党党首

「いまの混乱はわれわれの主張が正しかったことを証明している。有権者が分からなければ仕方がない。国民がそれだけのものだから」「日本人は変化を嫌うから」と相変わらずの不機嫌な様子に「いい政策なのだから忍耐強く」となだめる発言も。「新進党解党にボタンのかけ違いはない」「経済破綻で与野党を超えた大きな動きが出る」とも語った。

日本記者クラブは参議院選挙公示直前の六月二十二、二十三日に主要七党党首による連続記者会見を開いた。これまでは「総選挙は党首の討論会」「参議院選挙は幹事長書記長または政策責任者の個別会見」が慣例であったが、動きのとれない金融のまひ状態と、それに取り組む政治の側の不透明はいまや世界的な大問題。「国民を政治に回帰させたい。問題点を明示したい。今回は党首の会見が必要だ」と企画委員会が議論を重ねてこの連続会見になった。

した社やまとめて両面見開きで報じた社が多く、テレビは一般ニュースや衛星、有線放送の記録版で伝えたが、見ごたえのある企画だったとの反響は、連続会見がタイムリーだったことを証明した。企画委員諸兄姉からの息をつがせぬ組織的な鋭い質問は、党首から本音や反省の声を次々と吐き出させ、出席者、視聴者は久しぶりに記者会見の「味」を味わうことができた。「不良債権がこんなにあるとは知らなかった」と橋本総裁（首相）は、きわどい本音を吐き、せめぎ合う野党だが、一部からは意外な連携を予感させる発言もあった。（伊波）

起

一九九八年六月三日
土井たか子

▶土井たか子 社民党党首

「連立の評価」では反省の弁が続いた。おたかさんに反省は似合わないが、景気対策の話も「与党にいたくせにいまさら」と受け止められてしまい、つらい。厳しい質問に会場が静まり返る瞬間も、「弱者の連帯」「志」などの言葉によくやく戦後民主主義の旗手らしさが蘇った。「起」は「たつ」と読む。しかし状況は厳しい。再び起つ日が来るだろうか。

▲橋本龍太郎 自民党総裁

この日のために前夜わざわざ自分で原稿を作ったと言い、緊張して会見に臨んだ。幹事長時代に参院選で大敗し、野党転落への契機になったことが頭から去らないようだ。「支持率が下がっている原因を言われるなら、責任は私だ」「経済対策に手遅れがあったと認めてもいい」と苦しい答弁の連続。記念のネクタイを手にしてやっつと笑顔に。

起

橋本龍太郎

平成十年六月三日

6.23 (火)

小沢・自由党党首
司会 川戸恵子
代表質問
*宝利尚一 *宇治敏彦
*神志名泰裕 追田朋子
*菱山郁朗 羽生健二
出席 162人

土井・社民党党首
司会 菱山郁朗
代表質問
*川戸恵子 *追田朋子
*宝利尚一 神志名泰裕
出席 160人

橋本・自民党総裁
司会 岸井成格
代表質問
*内山敏夫 *川戸恵子
*宝利尚一 神志名泰裕
*追田朋子 菱山郁朗
出席 247人

ク ラ ブ ゲ ス ト

アンソン・チャン 香港政務長官



びつくりするような大型リムジンに乗って登場したアンソン・チャン長官は、早口で能弁だった。

九五年九月、行政長官当時に続いて二度目の当クラブ来訪。控室に入るなり、サイン帳を見て「ここにサインですか」と気安くペンを取りだした。次いで「通訳は逐条ですが、一括ですか」と質問するなど、いかにも手際のよい能吏という印象。

「香港のサッチャー」という異名を持つが、会見中に横から拝見したら笠置シズ子さんの若かりしころのようで、笑ったときは百万ドルの夜景ならぬ百万ドルのえくぼだった。

冒頭スピーチの後、内外五人の記者から質問が出たが、いずれも手際よくこなしていた。資料など一切持

たずに、当意即妙の答弁ぶりは、長年のキャリアを感じさせた。

「日本がキー・プレイヤー」。アジア経済危機に関連して日本の役割をこう指摘した。「中国元の切り下げは？」との質問には「朱中国首相は「切り下げない」と断言している。一部に信じない人がいるのも事実だが、私は信じる」と明言した。

こうした歯切れのよさや率直さが、香港のナンバー2として活躍している彼女の原動力なのだろう。

会見の目が天安門事件九周年で、香港民主派のデモが許可されるかどうか注目された。それに関連した質問も飛び出したが、チャン長官は「あらゆるデモが行われている。むしろ中国に返還後の方がデモの数は増えている。一件も拒否していない」と自信たっぷりだった。この自由の永遠なることを祈りたい。

中日新聞社取締役論説担当、東京本社論説主幹 宇治敏彦

6・4(木)記者会見 司会 宇治敏彦委員 通訳 西村好美 出席 92人

渡辺 泰造 前駐インドネシア大使



「スハルト研究会」(1)のインドネシア委員春名幹男 6.9(火)の研究会後 101人出席

インドネシア情勢の研究会だったが、出席者が百人を超える大盛況。ご本人もびつくりしたようだ。

昨年九月まで三年間駐インドネシア大使を務めた渡辺氏は、スハルト退陣劇の前後、テレビ各局に引つ張りだことなった。外交官出身というと当たり障りのない物の言い方を連想しがちだが、渡辺氏のコメントは率直かつ的確。研究会でも、端的な指摘が印象的だった。

ジャカルタに赴任してすぐに、「スハルト政権が長すぎて国民にあきられていことをびんと感じた」という。スハルト前大統領は時代の流れを敏感に受け止めることができなかつた」とは日本の政治家にも聞かせたいポイント。こんどの退陣劇では一九六五年九月のスカルノ失脚事件

当時のような大規模流血の惨事にならなかつた。なぜか。「蓋を開けてみるとファミリー以外はすべて反スハルトだったから」。ざぼり退陣劇の核心を突いて明快である。

半面渡辺氏は、石油危機のときスハルト前大統領が対日原油供給を決定してくれたこと、東南アジア地域の安定の支えになってきたことを挙げて、その功績への目配りも忘れなかつた。このバランス感覚は外交官時代に培われたものかもしれない。

さりげない一言が印象に残った。質問者が「大使」と呼びかけたのに対して、渡辺氏は言った。「大使」はちよつと……。わたしは昨年退官してから、政府の見解ではなく自分の意見を述べてきたつもりです」

外交官生活四十一年。中でもスポートスマン役の報道官や大使だったときには政府の代弁が仕事だった。これからは一人の国際問題専門家として自由な立場に徹したい。そんな気概がにじみ出ているように思う。

個人D会員(産経新聞OB)

友田 錫

ク ラ ブ ゲ ス ト

吉川 允二 日本原子力研究所理事長



6.10 (水) 研究会「原子力技
術の現状と将来」委員
出席 56人

高速増殖炉「もんじゅ」の事故以来、原子力には暗い話が多く、報道の目も厳しくなっているが、地球環境問題で二酸化炭素の排出が課題となり、頼るエネルギーといえは原子力しかないと認識されだした昨今。日本記者クラブで原子力の研究会が持たれた。

原子力にも将来が期待される技術や夢のある話がたくさんある。高温工学試験研究炉「HTTR」もその一つ。日本原子力研究所では近く、千度の高温が得られる高温ガス炉が臨界になるといので、研究会には原研の吉川允二理事長をお招きし、原子力技術の現状と将来について話を聞くことになった。

吉川理事長は昭和三十六年東京大学大学院理学部を卒業後、米国ジェ

ネラルアトミック社に入り、四十六年に日本原子力研究所に移った後は、平成七年に理事長になるまでずっと核融合などの研究畑を歩み、その道では世界的な権威者の一人。ゲートルームでは「夢と実践」とサイ

ンした。

原子力の話といえば非常に難しく理解しにくいのだが、吉川さんは「原子力・二十一世紀の夢」と題して、漫画のOHPを用意するなど、将来型原子炉や新しいウラン分離技術、中性子科学や高温ガス炉、核融合のほか、放射線利用、レーザー技術、放射光、計算科学などの最新技術と原子力研究の将来を、非常にわかりやすく話してくれた。

海中のウランを経済的に捕集できるの、日本の原子力発電所の燃料も安泰だとか、使用済み燃料の削減処理など、夢のある技術を紹介。現実に戻って厳しい質問も出たが、「たまには原子力、夢のある話も悪くない」と好評だった。

個人D会員 (日経OB)

浅井恒雄

西田 達雄 住友商事専務取締役



6.12 (金) 研究会「スハルト
後のインドネシア」(2)
委員 羽生健二
出席 86人

インドネシアに対して総額千五百億円近くのエクスポージャーを持つ住友商事。その住商きつてのインドネシア通、ジャカルタ駐在経験十五年の西田専務には、厳しいビジネス最前線の本音が期待された。確かに、「相当なもの(債権)を抱えていて、(先行きどうなるか)大変心配しているのも事実」と率直に認めながら、具体的なプロジェクトに触れることはなかった。あまりにも生々しい現実を前に、「本音」を期待するのが無理だったかもしれない。

聴衆の関心は、スハルト前大統領のファミリー・ビジネスの行方と、日本企業との関わりだ。西田氏によると、人口のわずか四%の華人系が経済の七〇%を握るといいうインドネシアの特殊構造のなかで、民族系企

業を育てようとしたところに、ファミリー・ビジネスは生まれてきた。日本に限らず、欧米企業も大型ビジネスに参画するには、ファミリーと手を組まざるを得なかった。政変のあと、スハルト一族が排除されるのはやむをえないが、実際に動いているビジネスを止めるようなことにならないか、心配だという。

ケースによっては、スハルト・ファミリーが退いたあと、その分を日本企業が引き取ることも出ているという。環境激変を逆手にとり、現地企業の経営をすっきりさせるとい

う、したたかな動機もあるようだ。

「とりあえずは輸出で切り抜けるしかない。それができるのは日系企業だ」とにかくこころ、二年はかなり辛抱を覚悟。二、三年先に回復基調に戻れるか、というところ。インドネシアをこよなく愛するという西田専務、言葉の端々から、経済復興への祈りに似た気持ちが伝わってきた。

TBS報道局経済部長

羽生健二

ク ラ ブ ゲ ス ト

牛尾 治朗 経済同友会代表幹事



財界の論客、経済同友会の牛尾治朗代表幹事を日本記者クラブの昼食会に迎えるのはこれが二度目になる。

リラックスした雰囲気の中に登場されると、さっそく参院選の投票率がW杯のテレビ視聴率に遠く及びそうにないことに触れ「政治もサッカーも一種の舞台だから、面白くないければならない」と政治に対する軽いジャブ。長年、劇団「四季」を後援している演劇通らしい軽妙な寸評だ。

が、なにせ世界中を騒がせた円売り投機が日米協調介入でやっと収まり、十七万国蔵相代理級会議で日本が注文を付けられ、政府と自民党が金融再生トータルプランの協議を始めたばかりというタイミング。スピーチでもその後の質疑応答でもおの

ずと焦眉の関心事が取り上げられ、活気に満ちたものになった。

牛尾さんの話は、改革派の一方の旗頭らしく、グローバルゼーション（世界の単一市場化）のすう勢のなかで「日本は一国繁栄主義を脱すべきだ」「国際社会の現実を出発点にモノを決めるやり方に切り替えるべきだ」と終始、構造改革の考え方に貫かれていた。

またアジアの経済危機について、「来年一月に欧州通貨ユーロが導入されると、ドルとユーロが国際通貨の中心になり、円はローカルカレンシーの一つに転落する」との危機感を表明。「円、人民元、パースなどASEAN通貨のバスケットによるアジア共通通貨を作ってはどうか」と具体策も提案。民間からこれだけ大胆な構想が打ち出されたのは恐らく初めてではないだろうか。

時事通信社解説委員長

福沢亜夫

6・24(水)昼食会 司会 羽生健二委員 福沢亜夫委員 出席 83人

オブ・ユールヨーゲンセン EU大使

着任して約二カ月、やっと信任状を奉呈した。天皇、皇后両陛下の訪欧などで、延び延びになっていたという。両陛下が母国、デンマークをご訪問されたことで「遅れても光栄です」と満足げだった。

一九七三年以来、デンマーク農業省、外務省でEC（欧州共同体・EU）欧州連合の前身）問題を担当、八一年から欧州委員会に移り、対外関係総局長、駐オーストラリアEC大使などを歴任。

温厚、堅実、冷静な印象で、夫人を同伴した会見で、時間をオーバーしても質問に丁寧に答えていた。

大使は冒頭、大胆な構造改革を實現したEUの経験が、日本の経済的苦境からの脱却に役立つのではない

かと示唆した。

EUは八〇年代前半の厳しい経済困難に際し、明確な構想、期限付きの詳細な計画、政治的決意で乗り切り、九二年の欧州単一市場を達成、来年一月には単一通貨ユーロを発足させることになったと説明した。

大使は「ユーロが国際基軸通貨に発展する」と強調、世界各国で広範に使用されると誇示した。

一方、日本、EUが重要なパートナーであるが、不良債権の処理などで依然日本を危惧していると語り、確固たる指導力で、必要な構造改革を実行するよう迫った。日本の政治家への厳しい忠告だ。

質疑で、日本、アジアの経済、金融危機打開策などについては慎重だったが、サッカーファンの大使はデンマークが初のW杯8強入りしたことは素直に喜んでいてた。

読売新聞社論説委員

宝利尚一

6・30(火)昼食会 司会 ワーグナー委員 内山敏夫委員 通訳 友田真理 出席 79人



■会議報告■

第193回会報委員会

(6・12 Cホール)

委員交代 (NTV・田村欣也氏から久保伸太郎報道局長兼報道番組部長)を報告、六月号について意見交換したあと、七月号の編集を協議した。より会員の声を反映した親しまれる会報作成を目指し、「会報アンケート」を実施することを決めた。

第268回企画委員会

(6・16 宴会場)

参院選を前に行う七党党首連続記者会見の運営、形式などについて協議した。

△理事交代▽

毎日新聞社

(新) 木戸 湊 常務取締役主筆

(旧) 斎藤 明

共同通信社

(新) 松崎 稔 専務理事編集主幹

(旧) 斎田 一路

信濃毎日新聞社

(新) 恒川昌久 取締役東京支社長

(旧) 斎藤治雄

出席 神塚委員長。住川、重村、宝

利、小島、立岩、小林、宇治、

福沢、神志名、迫田、羽生、

川戸、菱山、内山、和田、田

場、ワグナーの各委員。

第250回会員資格委員会

(6・16 小会議室)

委員交代 (読売・小谷直道氏から古川洋編集局長)を報告したあと、七月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 小田、北村、古川、河西、伊

藤、市村、船田、村上、玉川

の各委員。

第305回理事会

(6・17 宴会場)

一、別掲の役員の一部交代を承認した。

一、副理事長に杉田亮毅氏(日経)を互選し、総務委員長に神塚明弘氏(朝日)、会員資格委員長に松崎稔氏(共同)、企画委員長に木戸湊氏(毎日)を委嘱した。

一、クラブ活性化に関する総務委員会からの提案①三十五歳未満会費制度の新設②賛助会員入会の促進③記者発表の場としての機能促進④取材証の使用条件の変更を決定した。

出席 加藤理事長、斎藤、藤村の両副理事長、那部専務理事。神塚、杉田、住田、斎田、長谷川、田村(泰)、吉村、玉川、小笠原、黒澤、木下、三辺、石川、田村(哲)、西野の各理事。木戸、松崎、恒川の各理事。矢野、夏目の両監事。

△監事交代▽

北日本新聞社

(新) 有岡忠樹 東京支社長

(旧) 富尾 烈

△法人会員代表変更▽

毎日新聞社

(新) 斎藤 明 代表取締役社長

(旧) 小池唯夫

英文朝日

(新) 宮崎勝治 代表取締役社長

(旧) 近藤龍夫

共同通信社

(新) 斎田 一路 社長

(旧) 犬養康彦

常陽新聞社

(新) 岩波嶺雄 代表取締役社長

(旧) 野沢 忍

宮崎日日新聞社

(新) 長友貫太郎 代表取締役社長

(旧) 平嶋周次郎

「元サッカー少年・文学少女?」

ユールヨーゲンセン新EU大使の昼食会(6・30)にはハンヌ夫人も出席した。司会のワグナー委員(シユビエル東アジア特派員)に、趣味はサッカーと紹介された大使は、会見後の控室でもサッカーとの長い付き合いを披露。一方、夫人はスポーツ音痴だけれど、読書量は大使に負けないとばかり、訪日前に読んだ日本文学作品について感想を述べた。以下ご両人のお話から▼サッカーは高校からクラブに入り本格的にプレーし始めた。ミッド・フィールドやフォワードを受け持ち、キャプテンを務めたこともある。社会人になってからも元オリンピック代表選手などに混じり、デンマークの外務省本省からブリュッセルへ異動になる四十二歳まで、現役でプレーした。昔から読書が大好きで、いまもそれは変わらない。来日前に『菊と刀』や大江健三郎の主要作品にも目を通したが、特に感銘を受けたのは英国で活躍するカズオ・イシグロの『浮世の画家』と『日の名残り』だった。日本人の繊細さやこまやかさがよく表現されており、日本人らしきとは何かを考えるとときに役立つ作品ではないかと思う。(石川)

書いた話 書かなかった話

戦後版「赤ゲツト」物語

— 駆け出し記者のイギリス視察

藤原 房子

「えッ、あなたが取材するんですか。日経さんはこの問題を本気で取り上げる気があるんですかねえ」。出先で無遠慮に聞かれ「ハッ?」と言ったまま、新米の私は絶句した。昭和二十八年入社のこと、これに類することに何度も出くわした。他社と比べて少人数の社会部だったから、取材の現場には早くから出してもらえたものの、名前を覚えられたことを除けば、女性であつてよかつたことなど何ひとつなかった。

それが一挙にもとを取つた、と思つたのは、かけ出しの三年目にイギリス政府招待で一カ月余の視

察のチャンスをつかんだときだった。「女はいいなあ」「まさに女得つてところだね」などという先輩・同僚のやつかみ半分の声をあとに、女性ジャーナリスト御一行様の末尾にぶら下がって出かけたのは、昭和三十年五月だった。

「敵性言語」を大特訓

「もはや戦後ではない」と経済白書（三十一年刊）が総括した年である。イギリス政府は昭和二十年以降毎年、各界から数人を本國へ招き、政治、経済をはじめ市民生活までさまざまな分野を視察する便宜を提供していた。戦勝国と

はいえ、こうむつた痛手は大きかつたはずなのに、かつての植民地を含めて敗戦国日本も、その対象に加えていたのである。

突然降つてわい

た話に心は躍つたけれど、気がかりは英語力の不足だった。何しろ軍国少女のなれの果て。英語を「敵性言語」呼ばわりした時代に女学校教育を受け、戦後は戦後でアメリカかぶれを敬遠し、在学中は英会話サークルやアメリカ人教授らを取り巻く学生を冷ややかに眺めて暮らした。まさにあとの祭りである。

大使館に向いて英語による簡単な面接テストを受けた。英国で何を見たいかなどを尋ねられてどうにか答えたが、たぶん若い記者を一人入れておこうくらいのことろで決まつたのだと思う。

団長にサンデー毎日副編集長松

田ふみ子、他に評論家松岡洋子、雑誌「旅」編集長戸塚文子、共同通信社会部記者梶島敏子という頼もしい面々（肩書は当時。梶島さんを除いては故人）。渡航が決まつてからは紹介されたイギリス人女性から短期の特訓を受け、プリティッシュ・カウンシルからチャールズの首相時代の演説を録音したSPレコードなどを借り出して、夜な夜な家で耳を傾けた。全くの泥縄だった。

帽子に手袋、着物も必要?

あげく赤ゲツト風のひと騒ぎ。何しろイギリスは格式を重んじる国だから、レディーとしては帽子がある、手袋が必要、というアドバイスを真に受けて、私も買いに走つた。そのころ日本では女性の帽子は新婚旅行のトレードマークだった。空港に来た見送り人たちはさぞ目をむいたことだろう。

戸塚さんは主義としてスカートをはかなかつたが「ズボンでは……」とだれかに言われたのか、旅行中

は主義をまげたという「悲話」がある。また公式のレセプションでは民族衣装が喜ばれる、それも派手めがいいという助言があり、内心ぶつぶつ言いながらも宇野千代さんの店で和服を買った。帯は結んだものを背中にくり付け略式である。外国慣れした松岡さんも和服持参だった。

出発は羽田で、田舎の駅の改札口のような低い木の柵を抜ける。BOAC機はプロペラが四つうなりを立てており、旅の専門家戸塚さんが「プロペラが三つまで止まっても大丈夫だからね」と、自信に満ちた調子でのたもつたのを見て、私は素直に安心した。

目的地までは二泊三日がかり。最初に給油で降りたのが沖繩の那覇で、次はマレー半島中部とまるで空の各駅停車だった。シンガポールとセイロン島(当時)のコンボに二泊したので、コンボでは大使公邸に全員でおよばれし、道すがら見物もできた。ロンドンの政府御用達の古いホ

テルにはアフリカなどから来た同様のグループが滞在しており、私たちは寝室が三つあるスイート指定された。そこでの女五人の共同生活にはちよつとした珍談があるのだけれど、全員に公開のお許しをもらえない今となっては、書くことはばかる。

毎日の視察は英語の達人と一緒になので、実に骨が折れた。私は耳がウサギになるかと思うほど必死で聞き、よれよれの横文字で懸命にメモした。せつかく派遣してもらったのに原稿を書けないのでは申し訳ない。ホテルに帰ってから先輩に細部を確かめたかったが、さすがに口には出せなかった。

その埋め合わせみに、暮らしの様子や街角での見聞などをおりまぜて、報告かたがた社会部あてに何度か航空便を出した。帰国して初めてわかったことだが、デスクの温情か、それらが社会面の読み物としてすでに活字になっていたのには驚いた。こともあろうに特派員という肩書き付きで。

帰国直後に大失態

ある日有名チョコレート工場の見学中「日本のF社の方が今やずつと高性能の機械を使っている」という声が目元で聞こえた。戦災を受けた日本が最新の設備を採用したのはこれだけではなからう。しかし「ゆりかごから墓場まで」と言われた英国の社会福祉制度をはじめ各種の施設、医療、教育、住宅政策など暮らしに関するものもろを取材して、あまりの違いのため息が出た。その後も何度か消費者運動と行政対応、女性行政、環境対策などの視察でイギリスを訪ねる機会があったが、最初の印象がとりわけ強い。

滞在中はキャサリン・ウェストレークさんがついてくださった。彼女は日本育ちで日本語が上手だった。のちに夫君が公使で東京に着任された時には、ロイヤルシェイクスピア劇団公演に招待されたり、私たちも歌舞伎や食事にお招きしたりで旧交を温めた。

戦後を抜け出そうとする時期の日本の変化は急ピッチだった。道草をして二カ月半後に帰った時、羽田空港に新しく送迎デッキが完成しており、暗い空港で「お帰り」という声が頭の上から降ってきたのにはびっくりした。

帰国直後に私はびつくり書き込んだ大事なメモ帳をタクシーに置き忘れた。悔やみきれない大失態である。やむなく写真中心の連載を社会面に書かせてもらった。その第一回の前文が今思い出しても冷や汗が出るほど肩に力が入ったもので、先輩に冷やかされた。あれはメモをなくしたショックのせいだったと今でも思っている。



ふじわら ふさこ 会員 一九三〇年生まれ
 五三年日本経済新聞入社 社会部記者
 婦人家庭部記者 同編集委員を務める
 九四年退社 商品科学研究所長を経て
 現在(財)日本女子社会教育会理事
 長 東京都監査委員を兼務 九一年度日本記者クラブ賞受賞

書いた話

書かなかった話

ワーキング

プレス

「スハルト大統領が午前九時に辞任表明演説をします」——五月二十一日未明、インドネシア大統領府に詰めているストリンガー（情報提供者）からの電話でたたき起こされた。二十日夜に電話で話した反政府デモの学生の一人から、スハルト退陣が近いとのうわさがあることは聞いてはいたが、さすがに驚いた。テレビが中継したスハルト氏の辞任演説は淡々として、実質三十二年間も東南アジアの大国に君臨した最高指導者はあっけなく退場した。

実は、ジャカルタ騒乱が頂点に達した同月十四日に、住民の放火や略奪が続くジャカルタ北部の華人街を歩いていても、これがスハルト退陣に直接結びつくのか自信がなかった。切迫した顔の住民はわずかだった。主に十代の子どもたちがまるでお祭りのように商店を壊し、商品をお奪い、車に放火していた。それまで道を歩くと多数派のマレー系に嫌われる華人に間違われることもあったが、暴徒の関心は引かず、時たま、的をそれた投石が足をかすめただけだった。

暴動現場で知り合いのインドネシ

——インドネシア——

自由謳歌の
背後で…

▶加賀谷 和樹
(日本経済新聞社)

ア人記者が言った。「国軍が暴徒を抑えていない。だれか権力者が扇動した暴動だ」。この手の憶測はうわさ好きのインドネシア人の間で決まってくる。状況証拠ばかりで検証は難しいが、この時ばかりは真実味があった。スハルト氏はこうした事態を予測できたのにさして重要でない外遊の最中だった。スハルト氏が不在の間に起きた問題が、同氏が帰ってくと解決し、国民が「やっぱり親父（スハルト氏）がいないとだめなんだ」と合唱する。子供だましのよう

だが、スハルト氏が得意とした政治手法である。

スハルト氏が帰国すると騒乱は収まったが、スハルト退陣を求める学生のデモは続いた。携帯電話や電子メールで連絡を取り合った学生は、むやみに街頭に出るのはやめ、国会議事堂に集まった。騒乱を目の当たりにして、「あんな暴徒と一緒にされるのはかなわない」と名門インドネシア大学の学生は話した。この国では学生はブルジョアであり、プロレタリアートではない。特に貧富の差が大きなジャカルタでは、最後まで学生と一般市民、労働者の本格的な連携は見られなかった。

スハルト退陣で第三代大統領に就任したハビビ氏は、スハルト氏の側近だったこともあって評判は良くなかった。だから、政治犯釈放、報道規制の緩和などで国民の歡心を買おうとしているようにみえる。外国人記者が中心だが、スハルト氏と違ってインタビュにも応じる。インドネシア人には妙に寛容なところがあり、「しばらくハビビに任せてみようか」と、最近の世論調査では支持率が高い。

社会には開放感が広がっている。

車を運転していて交通警察に捕まったが、水戸黄門の印籠のように「改革！」と叫ぶと、これまで不当に高い罰金をとっていた警官がびっくりして見逃してくれたという笑い話もある。ハビビ大統領の演説は国務相時代と同様に長いが、独特の身ぶり手ぶりでもミカルだ。背後で直立する副官の軍人も時折爆笑する。スハルト時代には考えられなかったことだ。だが、自由を謳歌する国民の背後で、経済危機は確実に深まっている。地方ではコメや食用油の不足が目立ち、再び住民暴動も起きている。駐在してインドネシアを気に入る日本人は多く、五月の騒乱の最中にも商社マンを中心にジャカルタに残った日本人も少なくなかった。「インドネシア経済の回復のために役立ちたい」という声もある。ただし、これまで商売の相手だった華人実業家や役所の高官の多くは、「改革」を叫ぶ従業員や部下の突き上げで仕事どころではないらしい。

かがや・かずき 一九八八年入社 商品部
国際一部 アジア部などを経て 九六年からジャカルタ支局

農業県・鹿児島島の農畜産物の中で何を思い浮かべるだろうか。東京の人だったら「サツマイモ」や「鹿児島黒豚」だろう。ところが地元では「サツマイモ」は同じでも、次にくるのは生産量全国二位の「茶」や全国一位の「肉用牛（鹿児島黒牛）」を挙げる。最近地元でも知られるようになったとはいえ、鹿児島黒豚はなかなか出てこない。

東京で鹿児島黒豚の人氣がすごいらしい。農業担当になって一年、こんな声を畜産関係者からたびたび聞くようになった。しかし鹿児島県内では二、三年前から黒豚を店頭に並べるところがちらほら出てきたものの、量も少ないし、「売れている」という話も聞かない。何より十年前まで学生時代を過ごした東京で、当時鹿児島黒豚を見たこともなかった。「とりあえず様子を見てみよう」ぐらいの軽い気持ちで取材に入った。

東京はすごかった。百貨店、スーパーの店頭には、本物か偽物かを別にして鹿児島黒豚がずらりと並ぶ。地元では考えられない光景

だ。消費者、流通業者、行政などさまざまな人にインタビューしたが、どれも礼賛の声ばかり。「料理の素材として最高」「店のステータスを感じさせる商品」「必需商品」「豚肉の高級ブランド」…。人氣は本物だった。この実態をリポートしたのが、

列島報告

—鹿児島—

特産銘柄の実態追う

「かごしま黒豚物語」

宮路直人

(南日本新聞社)
(口本経部)
(政本)

偽物のはんらんに悩まされていた。農水省は「本物の十倍以上が出回っている」と推定し、流通業者も「流通のあらゆる段階で偽物にすり替わる」と証言。そして黒豚の定義が確立していないことが、偽物の横行に拍車をかけていることを指摘した。

二月から三月にかけて連載した第一部「東京味革命」(十回)である。鹿児島黒豚の出荷量は、国内の豚肉消費量の〇・四％に過ぎない。このわずかな豚肉が、流通や食卓に旋風を巻き起こしていた。巨大な流通機構に飲み込まれた郷土の特産物は、過熱する人氣の一方で

どの問い合わせが殺到したことだ。黒豚といっても鹿児島黒豚は、四本の足と鼻、尾の六カ所が白い。これを「六白(ろっぽく)」という。奄美で飼われてきた島豚がルーツで、鹿児島島の風土ともに四百年以上の歴史を持つ。五月に始まった第二部「六白を求めて」(十二回)

では、人氣を支えるうまさの秘密と生産者たちの純粋種の黒豚にかける心意気を描いた。取材中の第三部「復活の軌跡」(仮称)は、歴史と盛衰、高度成長期に絶滅の危機からよみがえった経緯を探る。来年まで合計八部を予定し、奄美島豚やもう一つのルーツといわれる英国バークシャー種を求めた旅、鹿児島黒豚に続けると全国各地で始まった銘柄豚づくりの挑戦などをリポートするつもりだ。物語は始まったばかり。鹿児島黒豚の全体像を説明することで、読者と一緒に日本人の食文化や農業の未来まで考えることができたい。

(みやじ・なおと)



長期連載で人氣の秘密から歴史までを

桜町遺跡フォーラム

北日本新聞社

六月十三日、日本プレスセンター十階ホールで、富山県小矢部市の桜町遺跡をテーマにした「桜町遺跡フォーラム―縄文研究のこれから」(北日本新聞社主催)が開かれた。桜町遺跡からは、縄文草創期から晩期までの遺物が出土しており、約一万年にわたる地層がバックされている。木材を十字に組み合わせる「渡摺(わたりあこ)仕口」の建築材や、全国で初めて見つかった山菜のコゴミなどが有名だ。

上野隆三・北日本新聞社長が「縄文の定説を覆す文化的財産を全国に知ってもらいたい」とあいさつ。発掘調査を担当した小矢部市教育委員会の伊藤隆三文化課長補佐がスライドを使って基調講演した。伊藤課長補佐と文化庁の岡村道雄主任文化財調査官、山田昌久東京都



立大助教、網谷克彦敦賀短大助教、黒尾和久東京都あきる野市前原遺跡調査会主任調査員の五氏によるパネルディスカッションが行われた。

コーディネーターを務めた岡村調査官は、桜町遺跡の重要性を「情報量の多さだ」と説明。網谷助教は、鳥浜貝塚(福井県三方町)の調査結果を踏まえ「各層ごとにしつかりした調査をすることが大切だ」と話した。山田助教は「桜町の情報はさまざまな視点を求めている」と、桜町遺跡の研究が考古学の転機になることを示唆し、黒尾主任調査員は「調査手法を議論できたのは画期的だ」と述べた。

会場には秋田から京都までの各自治体の埋蔵文化財担当者や熱心な愛好者ら三百二十人が詰めかけ、俳優で考古学に造詣が深い苧谷俊介さんも顔を見せた。

北日本新聞東京支社
編集部長

斉藤 寿

アラスカセ七〇周年

昭和三年、大阪の北浜にレストラン・アラスカが創業しました。最初はテーブル五卓だけの小さな店でした。本格的な西洋料理の味が人気を呼び、三年後には朝日新聞大阪本社の十階に本店を開き、広くその名を知られるようになり

ます▼昭和二年の金融恐慌から始まる大不況下であったにもかかわらず、旺盛なエネルギーにみちた新聞人、財界人などに支持され躍進していったようです。谷崎潤一郎、菊池寛、川口松太郎、水谷八重子などもお気に入りだったそうです▼クラブはプレスセンターに移転した昭和五十一年八月から、アラスカと業務委託契約を結び、会員のための飲食サービスを全面的にお願いしています。事務局としてありがたいのは、厳しい批評眼を持つ会員の皆さんから、一度として料理の味についてのクレームを聞いたことがないことです。また、いまやクラブの宝である名人パーテナー・吉富學さんの存在は、多少の問題を補って余りあると感謝しています▼バブル崩壊後の不況で、高級レストランの経営はどこも大変なようですが、七〇

周年を機にアラスカが新しい発展へ向けて前進することを期待したいと思います。(岩崎)

七、八月はアラスカ三店二割引

リノベーションのため七、八月の二カ月間、厨房も洗じよう器も使えません。アラスカは既報のようにマリオン店からカレー程度の軽食のサービスをしていきます。またこの間、次の三店を二割引で会員が利用できるようにしていただきました。会員証を示せば、相客も含め割引になります。この夏の臨時のクラブレストランとしてご利用ください。

有楽町支店(マリオン11F) 三二〇―一五七五五 パレスサイド支店(毎日新聞9F) 三二一六―二七九七 吾妻橋支店(アサヒビル吾妻橋ビル 21F) 五六〇―八一五〇〇―一
プレスセンター・ブライダルこれは改装後の話ですが、土曜、日曜に限り、アラスカは会員と会員の親戚の方々のために、「プレスセンター・ブライダル・プラン」を用意してくれました。ホテルと比較して二〜三割安の費用です。お問い合わせは三五〇二―七〇六四へ。

「現在の時と過去の時は、未来の
時の中にあり、未来の時は、過去
の時に含まれる。」

原作者ヴァージニア・ウルフの親
しい友であった、二十世紀を代表す
る詩人T・S・エリオットはこのよ
うにうたっている。

映画『ダロウェイ夫人』は、まさ
にこの詩のテーマのように「時間」

をタテ軸として第一次世界大戦
終了後間もないウィクトリア朝
末期のロンドンを舞台に、上流
社会の「愛と死」の世界を華麗
なタッチで描写している。

老年にさしかかったダロウェイ
イ夫人を演ずる、カンヌ映画祭
最優秀女優賞受賞のウァネッ
サ・レッドグレイヴの、現在のの
心境と若き時代の

愛についての独白
が、底の深い優れ
た心理劇に仕上げ
ている。

同時に、戦場で
の兵士の地雷によ
る爆死、戦争神経
症に悩む男性の投
身自殺、主人公の



ダロウェイ夫人

老いと性と死の問題な
ど、今日的社会的もそ
なえた重厚な作品とも
なっている。

かつて文学部に学ん
だ筆者は、文学・映画

好きの学生だった。ダロウェイ夫人
については、教科の必修として強制
的に原書を読まれた。そして、あ
る映画会社の助監督採用試験に
合格したこともある。

数年前、元同級生の直木賞作

家の出版記念会に出席したと

き、同席の文学部後輩の古永小

百合さんに、「もし私が映画監督
になっていたら、あなたを主演
に映画を作っていたのに」と話
したことがある。

——もし今、日本版『ダ

ロウェイ夫人』を撮るとし
たら、クラリッサの役は小

百合さん以外にないなどと
思いながら、過去の「時間」

にさまよいつつ、日本記者
クラブでの試写会を楽しむ
ことができた。

個人D会員 (NHKOB)

高橋 祥起

試写会

囲碁の会 夏季大会

白井会員 (共同OB) が優勝

恒例の夏季大会が六月二十七日
(土)開催され、白井敏之会員 (共
同OB) が優勝しました。

参加者は、新井明会長はじめ三十七
人。今回もスイス方式を採用、四局を
戦ったポイント数で順位を決めました。

まずは師匠に感謝

もう二十年も前の話になりま
す。杉内寿子八段から囲碁のあれ
これについて、ご意見をうかがっ
たことがあります。

「アマ向きの急速上達法はあり
やなしや」という小生の愚問に対
して、杉内先生が示された「秘伝」
は次のような内容でした。

第一に、できるだけ多くの実戦
を経験すること。

第二に、一局終わったら、必ず初
手から並べ直すこと。相手が上位者
だったら、要点の解説を聞くこと。



会長賞はワイン半ダース

主な順位は次の通り。(敬称略)

- 優勝 白井敏之、準優勝 伊藤光彦 (以上四勝)、③堀川敏雄 ④西山武典 ⑤田中信義 ⑥高井明昌 ⑦後藤光祥 ⑧松本昭男 ⑨中野正彦 ⑩重竹茂 ⑪高垣金三郎 (以上三勝) ⑫出田裕 ⑬中俣富三郎 ⑭小沢信昭 ⑮塚本一 ⑯齋藤寿 ⑰吉沢正也 ⑱田川五郎 ⑲都留重人 ⑳西崎哲郎 (以上二勝)。

秘伝を教えてもらったあと、第一
項目については忠実に実践してきま
した。一日に十局は打ちましたが、
成果は上がり、低調のまま歳月が
流れました。第二項目の教えをまっ
たく無視したのが原因、と、深く反
省しています。

しかし最近になって、同好会の強
豪であり、小生の三十年来の師匠で
もある石橋俊彦氏から要点の解説を
聞く習慣が定着し、腕前もやや上昇
してきました。石橋氏の周辺には同
好の上が集まり、さながら石橋学校
の様相を呈しています。

優勝を機会に改めて師匠に感謝。
ワインを飲みながら教えを受ける不
肖の弟子を今後もお見捨てなく。

個人D会員 白井 敏之

プロフィール

六月一日付入会の方々です。

◆個人D会員（五十音順）

SFのプレスクラブが移転

当クラブは海外の五カ所のプレスクラブと姉妹関係にあります。その中の一つ、サンフランシスコのクラブが移転しましたので、お知らせします。

マネジャーのマックレラムさんは、「金融センターや国際会議場に近くなり、取材拠点としてより便利になったと思う。シリコンバレーへは

車で四十分と近く、ハイテク関連の経営者を招き頻繁に会見を行っている」と、最近の様子を話してくれました。毎日バーは夜八時まで開いているので、夏の旅行の際には、ぜひ立ち寄ってください、とのことでした。

◆新住所

The Press Club of San Francisco
155 Sansome St. San Francisco,
CA 94104 U.S.A.
(Tel 415-986-7800)

なお、他の姉妹クラブは以下の通りです（住所は会員名簿に記載されております）。

- *ワシントン・ナショナル・プレスクラブ：電話（202-662-7500）
- *キャンベラ・ナショナル・プレスクラブ：電話（062-73-3744）
- *マニラ・ナショナル・プレスクラブ：電話（49-4242）
- *ソウル・コリア・プレスセンター：電話（773-6812）

●山形新聞社からサクランボ

今年も山形新聞社から極上のサクランボをいただきました。早速、ラウンジで会員の皆さまに「初夏のルビー」を賞味していただきました。

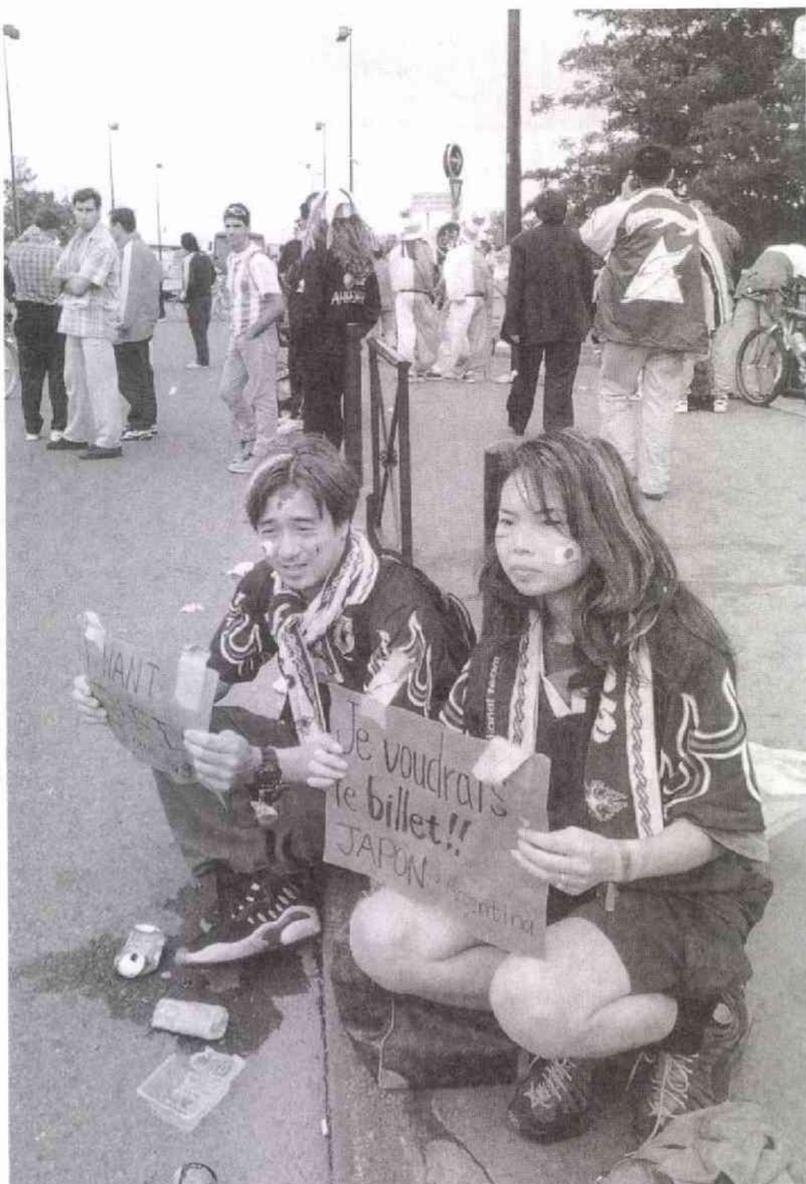
●寄贈書

追悼集 生涯政治記者 吉村克巳
吉村克巳追悼集刊行委員会

写真部

写真 藤原重信

(一九八五年サンケイスポーツ新聞入社 プロ)
野球 F-1などプロスポーツを担当



アルゼンチン戦の当日、スタジアムの外で
必死にチケットを求めるサポーター (6・14)

チケット狂騒曲

残念ながら一次リーグで敗退してしま
ったが、列島が熱く(青く?)燃えたサ
ッカーW杯。衛星放送をふくめ七〇%近
い世帯がテレビにかじりついた熱狂ぶり
は、梅雨空もよりの景気後退にうちひし
がれた人々が、つかの間の憂さ晴らしを
求めた側面もある。

それにしても、あのチケット不足騒ぎ
はなんだ。日本の対戦試合分だけでも約
二万枚不足と伝えられた。ところがフタ
をあげてみると、どの会場もほぼ満席。

もともと配分方法にも問題があったの
だろうが、一部旅行代理店やブローカー
の空売りや横流しによってダフ屋が横行
した。真相はやみの中だが、日本の旅行
業者がつけこまれる甘さがあったのはた
しかだ。

入手のあてもないのに出かけた「何と
かなるさ」組のなかには、ダフ屋に大枚
をはたいて何とかなった者もいた。何と
もならず場外で声援を送るしかなかった
△青い群れ▽は、同情はされたが冷笑も
浴びた。せめて日本が勝てば救いもあっ
たものを。

需要と供給の市場原理を思い知らされ
たチケット騒ぎだったが、二〇〇二年の
日韓共催時には避けたい悲喜劇だった。

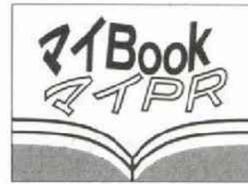
(和田 千年)

「会報アンケート」にご協力ください

同封のハガキでご意見を——会報委員会
 今号に「会報アンケート」のハガキを同封しました。編集や常設欄への感想、新企画のアイデアなど、率直なご意見をお寄せください。締め切りは七月末です。
 アンケートはこれまで三回（八二年、八六年、九〇年）実施しています。会報委員会では、今回の結果を参考にし、さらに会員の皆さんの声を反映した、より親しまれる会報を作成したいと思っています。結果は九月号に掲載する予定です。ご協力をお願いいたします。

「エルミタージュの緞帳—モスクワ特派員物語」

小林 和男（NHK解説委員室解説主幹）
 ソ連・ロシアの不思議、おかしさ怖さを、すべて体験に基づくエピソードで書きました。超大国が崩れて行くときの実感、ゴルバチョフやエリツインの虚像と実像、ソルジェニーツィンがなぜ今のロシアに重きをなさないのか、ぜひ知っていただきたいことです。
 第四十六回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞しました。日ロ関係が大切なとき、関心が広まれば嬉しいことです。
 （NHK出版 一、四〇〇円）



「記者がみたカンボジア現代史25年」

山田 寛（読売新聞調査研究本部主任研究員）
 この二十五年、ネット裏から、または遠くの外野席から見つめてきたカンボジアについて、ルポやエッセイや論文をまとめました。各章の表題も、「われわれは虐殺を報道したか」「フン・センは変わった」「日本の政治的役割」などから「ポル・ポトの妻」「女の一生」まで様々。雑貨店のような内容です。
 だから題名はおこがましいかもしれませんが、自分の報道も率直に採点したつもり。私の中のカンボジアに一区切りつけたと思います。
 （日中出版 一、二〇〇円）

「デノミが日本経済を救う」

小邦 宏治（個人D会員 毎日新聞OB）
 本書の執筆を思い立ったのは九七年秋、EUの単一通貨ユーロの誕生が確実になったときだった。国際通貨体制はドル一極体制から、ドルとユーロの二極体制へ地殻変動的な変化を遂げる。円はなんとしても国際化するためには一〇〇分の一のデノミを実施、両通貨に対して桁数をそろえなければ——というのが骨子。円の国際化は広く論議されだしたし、政界でもデノミの検討が始まったという。筆者としては嬉しいことである。
 （エール出版 一、六〇〇円）

七、八月は六時で閉室します

七月一日から九、十階のリノベーション工事が始まりました。八月末までクラブ利用は左記のようになりますので、ご協力願います。
開室時間 午前十時～午後六時 レストランは閉鎖しますが、ラウンジで軽食が召しあげられます。
バー・喫茶 ははは通常通りのサービスです。
ラウンジのソファ、テーブルを処分します
 リノベーションに伴って、ラウンジのソファとテーブル、アップライト・ピアノを処分することになりました。ご希望の方は至急事務局の河野までご連絡ください。

会報委員会

- 委員長 住田良能
 委員 久保伸太郎 秋山民雄 伊波新之助
 梶邑義道 和田千年 塚越喜昭
 連絡 長谷川和子 本庄五月
 (電話) 〇三―三五〇三―二七二二
 (FAX) 〇三―三五〇三―二七二二

- 会員現況 法人会員 一四九社 基本会員 八一二人 個人会員 一、八四九人 法人・個人賛助会員 五六社 一八一人 特別賛助会員 五四人名誉・功労会員 一五人
 計 二〇五社 二、九一人